



Title	災害ボランティア論の再構築に向けて
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	災害と共生. 2017, 1(1), p. 3-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67183
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

災害ボランティア論の再構築に向けて

Toward Reconstructing a Theory of Disaster Volunteers

渥美公秀¹

Tomohide ATSUMI

要旨

本稿は、現代社会における災害ボランティアを柄谷行人の交換様式の歴史的ダイナミックスの中に位置づけ、災害ボランティア論を再構築していくための展望を得ようとするものである。具体的には、2016年熊本地震の際、災害ボランティアセンターでは、筆者が提示してきた秩序化のドライブが席卷し、遊動化のドライブが無効化するかのような事態が見られたことに着目し、そのような事態をもたらした現代社会を交換様式のダイナミックスとして捉え、従来の災害ボランティア論が、既存の交換様式との十全な対峙を行わなかったために、新たな交換様式の到来を招来できていなかったことを指摘した。災害ボランティア論の再構築のためには、災害ボランティアと現代社会で主流となっている交換様式との異同を徹底的に追求し、それらの否定から、いかにして新たな交換様式を招来するかという点へと議論を進める必要があるとの展望を得た。

Abstract

The present study introduces and discusses a vision for a theory of disaster volunteers by locating voluntarism in the historical dynamics of modes of exchange by a Japanese philosopher, Kojin Karatani. First, I focus on one of the disaster volunteer centers opened following the 2016 Kumamoto Earthquake, where the drive for institutionalization proposed earlier by the author exceeded the power of its opposite drive (i.e., drive for nomadization) and, accordingly, created limiting factors for relief activities by disaster volunteers rather than expanding them. Second, I examine the societal context of disaster volunteers from the theoretical framework of mode of exchange and its historical dynamics, and argue that the theory of disaster volunteers was not prepared to initiate a new mode of exchange because it had not taken into account the current modes of exchange. Finally, I conclude that, to develop and reconstruct the theory of disaster volunteers, we should examine the similarity and dissimilarity between disaster volunteers and each mode of exchange thoroughly and discuss how the negation of the current modes of exchange can lead a new mode for disaster volunteers.

キーワード: 災害ボランティア、災害ボランティア論、交換様式、遊動化のドライブ、秩序化のドライブ

Keywords: Disaster Volunteers, Theory of Disaster Volunteers, Mode of Exchange, Drive for Nomadization, Drive for Institutionalization

1. はじめに

災害は、人間と人間、自然、社会、モノとの共生のあり方を根底から問い直す。共生の回復、改善には、具体的な事例と理論的な考察、そして、周到的な実践が求められる。そこに価値や感情は決して無縁ではない。本稿では、災害時の共生が阻害された場面として、2016年4月の熊本地震における災害ボランティアを採り上げる。そして、阻害の原因を理論的に考察し、その改善に向けた論点を提示する。

2. ある日の朝、熊本にて

2016年4月に発生した熊本地震の被災地でも、災害ボランティアセンターが開設された。ただ、現地

で救援活動を展開していた筆者らは、奇妙な風景に出会うことが多かった。午前中、その日のニーズとのマッチングが完了したとのことで、災害ボランティアの受付が終了し、列に並んでいたボランティアを断るという風景である。もし、本当に被災地にはニーズが1つもないのであれば、災害ボランティア活動は終了しても構わないだろう。しかし、ニーズが多様にあるのに、災害ボランティアセンターで受け付けられないから、帰るなさいと言うのはいかにも奇妙である。もちろん、災害ボランティアセンターで受付が終了したと宣言されたからといって、活動希望者も帰る必要はない。自ら被災地を歩いて、様々なニーズを探して対応すれば、被災者は

*1 大阪大学大学院人間科学研究科 教授・Ph.D. (Psychology)

Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University. Ph.D. (Psychology)

少しでも助かる。しかし、そうした活動への動きもほとんどない。なぜこのようなことになるのだろうか。

3. 災害ボランティアを取り巻く現状

渥美（2014）では、災害ボランティア活動には秩序化のドライブが強力に作動するから、それを制動し、その対極にある遊動化のドライブを駆動すべきであると指摘した。秩序化のドライブとは、災害ボランティアのマニュアルを制定し、災害ボランティアセンターでニーズ票などの様式を整備し、コーディネート的重要性を喧伝し、整然と活動する災害ボランティアがさも被災者にとってよいことのように考える社会の動向である。一方、遊動化のドライブとは、その反対に、災害ボランティアは、まず被災者の「ただ傍にいたいこと」から始まるからマニュアルは不要であるとし、ニーズはその時その場で多種多様であるから臨機応変に応じるべきだと考え、コーディネートよりも被災された方々への想いを大切に、即興的に対応していくことを推奨する社会の動向である。阪神・淡路大震災、中越地震、東日本大震災と経る中で、秩序化のドライブは猛威を振るってきたが、こうした2つのドライブは拮抗して作用していた。ところが、熊本地震での対応を見れば、もはや2つのドライブは拮抗すらできず、お互いにかみ合わないほどに乖離が進んでしまったように思われる。

このことは、現代社会を鋭く批判してきたイリイチ（1973 渡辺・渡辺訳 2015）の思想と呼応する。彼は、まず現代社会は、2つの分水嶺を越えてきたと捉える。医療を例にすれば、滅菌した水が下痢による幼児の死亡率を下げ、キニーネがマラリアを抑えるという段階で1つめの分水嶺が越えられた。ここまでは歓迎される結果をもたらしていた。ところが、医療が専門化し、医療業務が大病院に集中し、薬剤の無責任な使用が横行し、医療制度による独占が進行して、2つめの分水嶺が越えられて様々な弊害をもたらされているのが現代社会だと診断する。そして、この弊害を乗り越えるには、「各人のあいだの自立的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わり」を可能にするような「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由」としてのコンヴィヴィアリティ（自立共生）を可能にする道具（含、制度）が求められると提唱する。

災害ボランティアを重ねてみよう。災害ボランティアは、阪神・淡路大震災当時、行政では行いにく

い支援を実施し、被災者に安らぎをもたらし、第1の分水嶺を越えた。実際、今後の被災者救援にとって、なくてはならないものと期待された。ところが、秩序化のドライブに乗り、ついに経験をもとに専門家を自認する災害ボランティアが登場し、災害ボランティア活動の集権化、マニュアルの整備、災害ボランティアセンター制度の徹底による災害ボランティア活動の独占が進行し、2つめの分水嶺を越えてしまったのが熊本地震だったのではなかろうか。

4. 災害ボランティア論再構築に向けて：交換様式 D

災害ボランティアが、原点に立ち戻り、被災された人々の安寧を第一に考えるのであれば、第2の分水嶺は、決して越えてはならなかったはずである。第2の分水嶺を越えてしまった災害ボランティアを、被災者のもとに取り戻すにはどうすればよいだろうか。そのためには、被災者本位で動こうとしている災害ボランティアのあいだの自立的で創造的な交わりと、災害ボランティアと被災地との自律的で創造的な交わりを可能にするようなコンヴィヴィアルな仕組みを整えなければならない。そのための原理的な考察、理論的な整備が求められる。本稿をその方向性、展望を示す災害ボランティア論再構築の第一歩としたい。

そこで、災害ボランティアを理論的に考究するための参照点として、柄谷行人による『世界史の構造』（2010）、および、その後関連して公刊されている柄谷の論文・著作（例えば、柄谷（2015）からの連載）に注目し、災害ボランティアの文脈でこれらの著作からの示唆を吟味する。

柄谷は、社会構成体の歴史を、A、B、C、D という4つの交換様式のダイナミックスとして描く。まず、交換様式Aの前段として、定住しない遊動的な狩猟採取社会の交換様式Uの存在を認め、その否定によって交換様式Aが生まれるとする。交換様式Aは、贈与と返礼を基本とする相互扶助的な交換様式である。典型的には、共同体が対応し、その成員は、共同体に束縛される。交換様式Bは、収奪と再分配を基本とする交換様式であり、身分的支配・服従関係や国家がこれに対応する。交換様式Cは、商品交換を基本とする交換様式で、自由な合意に基づいてはいるが、実質的には、貨幣保有者と商品所有者との交換であって、（身分的というわけではない）階級社会が対応する。そして、交換様式Dは、交換様式A、B、Cを無化する様式として、強迫的に「いまだなかったもの」として未来から到来するように交換

様式 U の高次元での回帰として立ち現れる。さしあたって、局所的に短期間存在する想像的な交換様式としておく。

柄谷によれば、どのような社会構成体も、交換様式の複合体であり、いずれが支配的であるかによって異なった社会が出現する。

まず、遊動的な狩猟社会の交換様式 U を捉え、それを自由で、獲物を平等に分配する社会として描く。この遊動性が原点である。しかし、定住が進むことによって、富の蓄積が始まり、階級分化が生じると、（原初の遊動性は抑圧され）互酬性としての交換様式 A が支配的に現れる。交換様式 A が支配的となった社会は、氏族社会、ミニ世界システムと呼ばれるが、そこには、交換様式 B（例えば、戦争）もあれば、交換様式 C（例えば、交易）もある。ただし、交換様式 D は、ここでは顕在化しない。

次に、交換様式 B が支配的となるのが、国家社会である。この場合も、農村共同体のような交換様式 A や都市のような交換様式 C も併存している。ただし、農村も都市もあくまで国家（交換様式 B）に従属して存在している。これが拡張されると国家＝帝国となる。

そして、近代資本制社会は、交換様式 C が支配的であり、その下に、交換様式 A や交換様式 B も併存する社会である。これが拡張されると、世界＝経済という様相を呈する。柄谷は、このような現代社会を、「資本＝ネーション＝国家」と記してきた。

交換様式 D は、交換様式 A、B、C を無化するあり方とされる。交換様式 D は、交換様式 A のそのものの単純な回帰ではない。過去の共同体の回復ではなく、その否定をもとに、U（原遊動性）が強迫的に高次元で回帰することで成立する。それは過去からではなく、未来から到来するかのように見える。D は、人が望むような理想社会として構想されたものではない。あるいは、かつてあったものを回復することでもない。「いまだなかったもの」の到来なのである。交換様式 D は、この「資本＝ネーション＝国家」を超える社会を支配する交換様式として指し示される。ただし、その様式は明確には語られない。

柄谷は、「抑圧されたものの執拗な回帰」というフロイトの理論に見られるモチーフを導入している。交換様式 A は、定住化にともなって、それ以前の狩猟社会における遊動性 U を抑圧して、互酬性を成立させていた。この場合の互酬性は、特定の相手に対する贈与と返礼が支配的な交換様式であり、顔の見える関係やネーションという（想像の）共同体での

返礼を重んじる関係である。その交換様式 A は、交換様式 B（が支配する社会）、交換様式 C（が支配する社会）と至る過程で、さらに抑制される。ところが、交換様式 A のもと、ある契機を経て、それ自身が否定していた U が高次に強迫的に回帰してくる。それが、交換様式 D である。

交換様式 D の例として、普遍宗教、イオニアのポリスの原理であるイソノミア（無支配）が挙げられているが、災害後の社会も交換様式 D の様相を帯びるとされている（柄谷, 2011）。具体的には、「災害はそれ自体『ユートピア』をもたらすことはなくても、資本＝国家への対抗運動の引きがねを引くことになりうる」（p.41）、「被災者や支援者は、一種の遊動民です。だから、住居が定まり、さまざまな諸関係に属するようになると、そのような自由と平等は失われる。D は消えてしまいます」（p.40）という。

交換様式 D は、交換様式 A が、一度抑圧された互酬性とその背後に遊動性を帯びて高次に回帰してきた結果生じるのであった。互酬性は、特定の相手と贈与と返礼を行う関係とされるから、それが高次になることを、ここでは、不特定の相手に対して行われる、返礼を求めない純粋な贈与の関係だと考えてみよう。いわば、誰彼構わずに、贈与を行うが、その見返りは求めないということである。無論、贈与は、贈与であると察知された瞬間に贈与ではなくなるから、純粋贈与は、決して到達できない理論的な極値としてあるとも言える。そして、この（純粋）贈与を可能にするのが遊動性である。実際、柄谷は、災害後に生まれた交換様式 D が消失する契機を定住による遊動性の消失に見ていた。

ここに、交換様式 D と災害ボランティアとの関係を見ることができる。すなわち、災害ボランティアが、災害時に遊動性を顕著に示すことができれば、災害ボランティアは、閉塞感に満ちた現在の資本＝ネーション＝国家を超えていく契機となりうる。災害ボランティアは、不特定の被災者に対する、見返りを期待しない一方的片務的な活動であり、言葉の純粋な意味で贈与を理想とする。だとすれば、災害ボランティアの活動こそが、交換様式 U が高次に回帰した交換様式 D への契機であると考えることができる。しかし、熊本地震で見たことは、ここから大いに逸脱している。それはなぜか、どうすればいいのか。これらを考究するための論点を提示していくことが、災害ボランティア論を再構築する糸口となる。

5. 交換様式 D 到来の阻害要因

災害が発生すると、既存の社会—交換様式 C が支配的で交換様式 A、B が存在—が一時的であれ崩壊する。その結果、もとの状態を回復しようとするドライブ（秩序化のドライブ）が作動するが、同時に、それと拮抗し無化する遊動化のドライブも強力に作動して、原遊動性 U が高次元で強迫的に回帰する（交換様式 D が到来する）可能性が高まってもよいはずである。ところが、熊本地震の現場では、筆者が観察している限り、その気配は感じられない。むしろ、2つのドライブが拮抗せず、互いに相手を失って、かみ合っていない。

交換様式 D は、交換様式 A、B、C の延長線上にはなく、交換様式 A、B、C の徹底的な否定によってのみ立ち現れる。だとすれば、交換様式 A、B、C が徹底的に否定できない（あるいは、否定に値しない）ほど、両義的であったり、曖昧だったりする現状では、交換様式 D の到来は阻害される。

そこで、災害ボランティアについて考察し、現状を改善するには、単に遊動性を高めるということではなく、むしろ、他の交換様式との対応を厳密につけ、それを抑圧・否定していく作業が求められる。例えば、災害ボランティアや NPO が行政との融合を図る現状は、交換様式 B の否定への動機を阻害している。以下では、災害ボランティアが各交換様式の否定になり得て、交換様式 D の到来を迎えるための可能性を拓けるように、災害ボランティアと各交換様式との異同を検討する際の論点を例示する。

5.1 交換様式 A と災害ボランティア

交換様式 A は、互酬性であり、氏族社会に代表される。その否定は、贈与ということになる。純粋贈与の不可能性、共同供託の可能性、〈借り〉の哲学（Sarhou-Lajus, 2012 高野・小林訳 2014）など論点も多い。ここでは、災害ボランティアを利他行動として論ずる場合の論点を示しておこう。

災害ボランティアが単純な利他行動ではなさそうだということには容易に気づく。しかし、利他行動の観点からの災害ボランティア論は必ずしも徹底されていなかった。例えば、利他行動の境界性に関するダイナミックスについては、ある行動が、特定の内集団において利他的であっても、同じ行動が、その外集団に対しては利己的に捉えられる場合がある。また、そもそも利他行動の対象（例えば、被災者とする範囲）が、理論的には任意に同定できるため、集団の境界そのものが動的である。利他行動の評価についても、災害ボランティア論においては、理論的に徹底されてこなかった。

実際、災害ボランティア活動の現状は、受援者の範囲について極めて素朴に同定される。また、活動から得られるもの（例えば、単位）が措定されることもある。その結果、何がどこまで贈与され、誰が利他的だと評しているのかさえ同定できない。このように、贈与と利他性に関連する論点が十分に吟味されていないことが、交換様式 A の十分な否定を困難にし、最終的には原遊動性（U）の高次元での強迫的な回帰を阻んでいる。ここで挙げた論点を含めて、交換様式 A における災害ボランティアについて徹底した議論を行っていくしかなかろう。

5.2 交換様式 B と災害ボランティア

交換様式 B は、集約と再分配であり、国家に代表される。災害ボランティアは、国家から離れようとする志向をもち、また、取り込まれないようにする、と考えたからこそ、国家（や企業）とは異なる第3のセクターとして期待をもって迎えられた。

ところが、現状では、国家（行政）との関わり方が極めて曖昧に留まっている。例えば、阪神・淡路大震災以来、災害ボランティア活動の現場に身を置いてきた人々を中心に、その経験を社会に（国家に）認めさせて、専門性に依拠した災害ボランティアのコーディネートを正当化する動きがある。無論、災害ボランティアが自由に被災者に寄り添うことができるためにこうした動きはとられているはずであるが、こと国家との関係においては、国家に取り込まれつつ、国家から逃れるという曖昧さをぬぐい去れない。これは、檜垣（2012）が紹介しているドゥルーズ＝ガタリ（1980 宇野・小沢・田中・豊崎・宮林・守中訳 1994）の徒党集団と親和性があり、徒党集団が、国家から逃れる存在であると同時に、時に国家に取り込まれたり、深部で連続していたりする姿は、現在の災害ボランティアに重なるとの指摘を檜垣立哉氏から受けた。無論、この重なりから、両者の異同を検討し、災害ボランティアと国家との対応を厳密につけていく作業が必要である。

また、災害ボランティアは、災害によって露呈する様々な問題（例えば、過疎）に直面する。ここで、過疎集落の復興支援をすることと、過疎問題の解決に取り組んで社会運動を展開することとの関係が突き詰めて考えられてこなかった。今後は、ボランティアと政治運動との関係がどうあるべきかという議論がもっと展開されていく必要があろう。さもないと、災害ボランティアと交換様式 B との対応が曖昧に留まり、交換様式の否定が困難となって、交換様式 D の到来が阻まれ続けることになる。

5.3 交換様式 C と災害ボランティア

交換様式 C は、市場交換によって形成される市場経済である。災害ボランティアが被災地に赴く際に交通費を軽減しようという動きがある。ボランティアバスの運行が法的な問題を孕むと指摘されるとたちまちバス運行経費に影響が出る。災害ボランティアセンターを運営する際には、経費を出す団体もあれば職員を派遣する団体もある。無償ではない。

こうした現状は、交換様式 C である市場交換を徹底するのでもなく、否定するのでもなく、単に緩和する動きである。このことが災害ボランティアと交換様式 C との対応を曖昧にし、交換様式 C の否定が困難となって、最終的には、原遊動性 (U) の高次元での強迫的な回帰を阻んでいる。

6. 災害ボランティア論の再構築に向けて

災害ボランティア論の再構築を促すためには、事例をもとに、多様な論点を導入しながら、交換様式との異同を徹底的に追求し、その否定を介して交換様式 D の到来を阻害する要因を排除していくべきであろう。現状では、災害ボランティアと交換様式との対応を曖昧にしていることが、最終的には、原遊動性 (U) の高次元での強迫的な回帰を阻んでいる。災害ボランティアを交換様式 A、B、C の徹底的な否定として捉え直すこと、これが災害ボランティア論再構築の方向性である。連動して実践される災害ボランティア活動から、多様な人々を含む共生社会の展望を拓くことを課題としたい。

参考文献

- 渥美公秀(2014) . 災害ボランティア論 弘文堂
- Deleuze, G., & Guattari, F. (1980). *Mille Plateaux*. Minuit.
- (ドゥルーズ, G.・ガタリ, F. 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明 (訳) (1994) . 千のプラトー 河出書房新社)
- 檜垣立哉(2012) . ヴィータ・テクニカ : 生命と技術の哲学 青土社
- イリイチ, I. 渡辺京二・渡辺梨佐 (訳) (2015) . コンヴィヴィアリティのための道具 ちくま学芸文庫
- 柄谷行人(2010) . 世界史の構造 岩波書店
- 柄谷行人(2011) . 『世界史の構造』を読む インスクリプト
- 柄谷行人(2015) . Dの研究 [第1回] 宗教と社会主義 at プラス, 23, 4-25.
- Sarthou-Lajus, N. (2012). *Eloge de la Dette*. Presses Universitaires de France.

(サルトル＝ラジュ, N. 高野優 (監訳)・小林重裕 (訳) (2014) . 借りの哲学 太田出版)